

令ば湖南城步縣南の苗、又は貴州烏下江の苗地のことく、其地圖の不明なところは、明に境界をしるしてアランクにした所を、これは又あまり地名も地形も變化せず、そのまゝに境を取り去つて胡麻化したり、浙江、江蘇の圖幅に於ても、盛京故宮本は水系が尋常であるけれども、北京故宮本は明代の地圖の跡に從つて太い水系を入れて支那化してゐるといふ缺點がある。よく見ると●點や○點のある地點を略し、地名のみを列記してゐる。蓋し之を盛京版に比較すれば儘に一歩退歩の跡が明かである。大體支那の地圖はいつでも初發がよい。賈耽、朱思本すべてひし乾隆庚辰間、即北平故宮圖に至つてやゝ見劣りがする。その後の胡文忠の大清一統圖によると更にプロセクシヨンの上に見劣りが生じ、地名も粗末になる。これは支那學者の缺點であるが、さうしたことを知るために、この同じ時代の兩圖が出たことは喜ばしい、不幸にしてより良き盛京故宮圖は、價格が安い。しかし滿洲字が多いから讀みにくい缺點がある。けれども之を大清一統圖又は北平故宮所藏本に比較して見れば大方は讀める。但し大清一統圖は後年の作であるから地名に缺點が多い。従つて乾隆十三排一統圖は座右に置かれねばならない。十三排とは一枚の大圖を十三段に横にきつたといふことである。いづれにしても支那で西洋流に測量をしたままつた地圖は乾隆以後今日に至つてまだ存在しないのであるから、支那學の上に本圖の須要なるは言を俟たないのである。

序に云ふがこの兩圖には混同江(黒龍江)の江口に庫額烏即樺太島をしるしてゐるので、樺太の島の發見は間宮林蔵以前にあるといふ人もある。しかしこの兩圖の樺太は、蛸蚪状をなしてゐて、間宮林蔵が記した樺太程に正しく記されてゐないのでなく、蝦夷も日本もない。朝鮮の形も歪んでゐるのであるからこの圖によつて間宮林蔵の探檢の功を没却することは出来ぬ。このことは小川教授が明治四十二年八月の地學雜誌に述べられた通りである。(藤田元春)

●Lor-lan, China, Indien und Rom im Lichte der

Ausgaben am Lohmor.

Albert Hermann

著者 A. Hermann 氏は古代中央亞細亞を經て行はれた支那羅馬間等の絹貿易に關する研究を以て知られた史家である。従つて本書は、勿論かの Sven Hedin 氏に依つて一九〇〇年羅布淖爾の旁に發見せられた二千年前の古市樓閣の歴史を、其地に發掘せられた多數の遺物古文書を資料として述べたものではあるが、然し單に古代支那の守備市たりし樓閣の歴史ではない。寧ろその重點は廣く東トルキスタンの文化史的地位、此の地を經て行はれた東西交渉の状態等に就いて迄も深い史的考察を與へるにある様に見えるのであつて、本書を通讀すれば容易に、著者が China, Indien und Rom im Lichte der Ausgaben am Lohmor. なる副題を附してゐる所以も理解し得られる。尤も本書の目的が元來通俗一般的にあつたが爲に、立論上史料の

引用、参照論文の批判等が殆ど省略せられてゐる嫌はあつたが、然しこれは又一面廣汎な機關史を吾人に平易に且概括的に了解せしめるものである。尙機關研究の歴史、羅布渾爾地方の地勢の變遷に關する二章が加へられてゐること、卷頭に機關廢墟の發見者 Sen Heidin 氏が序文を寄せて、氏の發見にかゝる古文書類の研究が、K. Himly 氏より A. Comandj 教授に、更に又本書の著者 A. Hermann 氏にと相繼がれた有様を、言はゞ本書の生ひ立ちの記を深い感慨を以て記してゐるのも看過せられなごうである。(一六〇頁)、挿畫六六、附圖七 Leipzig: H. A. Brockhaus, R. M. 6.50—麻裝—7.50〔内田〕

● 歐人の支那研究

石田幹之助著

學東西に通じたる博學の石田氏が筆をとつて「歐人の支那研究」なる一書をもてせられた。待望久しかりし本書を机上に備ふるを得た事を非常な喜びとする。

さて本書の内容を一瞥するに、

一、序説 二、古代及中世初期に於ける支那に關する智識 三、中世後期に於けるアラビヤ人の支那に關する智識 四、蒙古人物興時代に於ける支那に關する智識 六、東印度航路の發見と歐人の東航宣教師の支那研究支那學の成立なる六章に分たれる。其概略を述べれば、

第二章古代に於ては西曆紀元前後「ギリシヤ」人の間に支那が「セリケ」「セレン」の名によりて知られると共に他方「シン」「シ

ナイ」の名を以て知られた二派の智識が存在した事を説き、中世初期に於ては東ローマと突厥との交渉に由りて、支那は「タウガス」「チニスタン」なる名によつて紹介されたりと言ふ。

第三章中世後期となるやアラビヤ人の活動目覺ましいものがあり、支那を紹介するに與つて力ありたるアラビヤ人「イアン・ホルダードベ」「アブサイド」等を説く事極めて詳細である 第四章蒙古人物興時代に入るや有名なる「プラノカルビニ」「ルアルツク」更に又「マルコポーロ」の三大旅行家の報告に關する解説至つて詳密である。

次章に於ては、元より明初にかけて支那に渡來せる幾多の宣教師及商人によりて書き殘されたる書簡並に報告、即ち前者の作にかゝる「オドリコ」の紀行東方タタリ奇聞、或は後者の「商業指南」等を此時代に於ける支那に關する智識として述べられ更に歐人ではないが東方の見聞を西洋に齎らしたものととして忘れる事の出來ぬ「イアン・パツタ」の事蹟を掲げてある。

最後の章に於ては東印度航路の發見以後支那に來れる宣教師の支那研究に就いて述べられこの時代を更に區分して「明清鼎革の時代及康熙帝の初期、康熙中葉より雍正時代、乾隆隆時代之三となす。而して歐人の眞の意味に於ける支那研究はこの時代に始まり、こゝに於て歐人の支那學は成立せるものと見做され、各期を通じて支那研究に貢獻した宣教師並に其の功績を説く事詳細である。然しこゝに一々列舉する餘裕を有しない爲に省略する。最後に近世支那學の鼻祖と云はれる「レムユイザ」